

第一章…「あんた、バカア？つて言うだけの旅行じゃないのよ、これ！」

「ふん。こんな古臭い、田舎の旅館に連れてくるなんて、センスがないにもほどがあるわね」  
特急を降り、鈍行列車に乗り換え、さらに最寄りの駅から送迎車で揺られること三十分。  
山間の温泉地にある老舗旅館『紅葉館』に到着するなり、アスカは開口一番、眉間にシワを寄せてそう言った。

時刻は夕方五時。山の空気は澄んでいて少し冷たい。

目の前にある木造の二階建ての建物は、確かに最新のリゾートホテルとはかけ離れている。磨き上げられた廊下、年季の入った梁、そして窓の向こうに見える赤く染まり始めた紅葉。派手さはないが、落ち着いていて品のいい、文句なしの老舗旅館だ。

「おいおい、着いた早々そんなこと言うなよ。予約取るの大変だったんだぞ、ここ」

俺がそう言うと、アスカは真紅の髪を翻し、ふん、と鼻で笑った。

「私の休暇だもの、これくらい当然でしょ。どうせ貧弱なコネと財力じゃ、これ以上の場所は望めないって分かってるわよ」

傲慢な物言い。いつものことだ。

この高慢ちきで、負けず嫌いで、常に世界が自分を中心に回っていると思っっているセカンドチルドレン。

だが、その強がりが、幼い頃に見た悲しい瞳の裏返しだったことも、俺は知っていた。彼女はいつだって、自分の価値を証明することでしか安心を得られない、脆いプライドの塊だ。

そんなアスカが、まさか俺からの「温泉旅行」の誘いを、渋々ながらも受け入れた。それだけでなく、俺にとっては奇跡みたいなものだった。

「さっさと入るわよ。いつまでもこんな場所で突っ立っていると風邪を引くわ。私の体調管理ができないで、どうするつもりなの」

結局、氣遣っているのは自分のことばかり。そういうところが、本当にアスカらしい。

◇

女将に案内されて部屋に通されたのは、本館の中でも最も景色の良い角部屋だった。

十二畳の落ち着いた和室には、床の間に活けられた野花と、障子越しに差し込む夕日が暖かさを添えている。

窓の外はまさに絶景で、眼下には溪流と、その周りを彩る鮮やかな紅葉のパノラマが広がっていた。

「へえ……まあ、景色だけは悪くないわね」

アスカは荷物を放り出すと、すぐに窓際に座り、腕を組んでその景色を眺めた。

「だろ？ 夜は星が綺麗に見えるらしいぞ」

俺がそう言うど、アスカは振り返りもせず、

「当然でしょ。都会の汚れた空なんかと一緒にするんじゃないわよ」

と、いつもの調子で言い放った。それでも、彼女の声に微かな上機嫌の響きを感じて、俺は安堵する。

「さて、とりあえず浴衣に着替えるか。温泉、入るんだろ？」

俺がそう促すと、アスカは「フン」と鼻を鳴らしてから、立ち上がった。

「誰と一緒に風呂に入ってやるっていうのよ。まずはアンタなんかより先に、この疲れた身体を癒すだけよ。私が先に入って、その後で入れればいいわ」

彼女の言う通り、まずは女湯と男湯で分かれるのが普通だ。分かっているのに、つい冗談

めかして言ってしまうのは、彼女の反応が見たいからかもしれない。

部屋の隅に用意されていた浴衣のセットを手に取り、アスカは自分の分と俺の分を分けて投げ渡した。

「ま、サイズが合わなかったらアンタが悪いわよ」

そう言いながら、彼女は自分の浴衣を広げる。鮮やかな紅色の柄が入った浴衣で、アスカの肌の白さに映えそうだ。

「お前は赤が似合うな」

「うるさいわね！別に似合うとか関係ないでしょ。用意されていたものを着るだけよ。文句があるなら、自分で用意すればよかつたじゃない」

そうは言っても、彼女の頬が少し赤くなっているのを俺は見逃さなかった。

プライドが高すぎて、素直な褒め言葉一つ受け取れない。その照れ隠しのツンが、たまらなく可愛いんだが、それを口に出せば間違いなく「あんたバカアッ」が飛んでくる。

「さて、着替えるわよ。向こう向いてなさい。私の着替えをジロジロ見るなんて、五年早いんだからね」

「わかった、わかった」

俺は素直に背を向けた。背後で、カサカサと浴衣の衣擦れの音がする。

少しの沈黙の後、小さく、しかし耳に残る「フンッ」という、息を吐く音が聞こえた。アスカが帯を結ぶのに苦戦している音だ。

「……ちよ、ちよつと！この帯、どうなってるのよ！固すぎて締まらないじゃない！」

我慢できなくなったアスカが、ついに不満を爆発させた。だが、俺に助けを求めるような弱さを見せるのは、彼女のプライドが許さない。

「アンタのせいじゃないからね！ この旅館の帯が欠陥品なのよ！」

「はいはい。欠陥品なのはアスカの不器用さじゃないか？」

「何ですって！？」

振り返ると、アスカはまだ帯を締めている途中で、浴衣の襟元がはだけ、胸元が大胆に露わになっていた。

彼女がいつも誇る、豊満で大きな胸。浴衣という日本の衣装は、その膨らみを隠すどころか、逆に強調しているように見える。

そして何より、そんな姿を俺に見られていることに気づいて、アスカの顔は一気に真っ赤になった。

「あ、あんた、いつまで見てるのよ！ マヌケ！ さっき向こう向けって言ったでしょ！？」

「ああ、ごめん。でも、帯、手伝おうか？」

「い、いらないわよ！こんなの、自力でできるに決まってるでしょ！」

彼女はそう言い張るが、手が後ろに回らず、帯と格闘している。顔は真っ赤で、目は潤んでいて、もう意地になってるだけだ。

「その『自力でできる』子が、もう二分も格闘してるんだろ？いいから、ちよつと失礼するぞ」

俺は無言を言わずアスカの背後に回り込み、まだ緩んだままの帯を手を取った。アスカは一瞬びくっと体を震わせたが、抵抗はしなかった。だが、その声は震えている。

「ちよ、ちよつと、触るんじゃないわよ！セクハラで訴えるわよ！」

「はいはい、セクハラね。急いで締めるぞ。このままじゃ風邪ひくだろ」

彼女の背中に密着するように立つ。浴衣越しても、彼女の肌の温かさが伝わってくる。帯を締めるために腕を伸ばすと、必然的に俺の腕が、アスカの大きな胸のすぐ横をかすめた。

「ひゃっ！」

アスカは小さく息を飲んだ。耳元で、彼女の早い鼓動が聞こえる。これは俺のせいか、それともただ焦っているだけか。たぶん、両方だろう。

「……わざとやってるでしょ。このド変態」

小さな声で、アスカが呟いた。その声には、怒りよりも、照れと微かな甘えが混じっていた。

「まさか。これは着付けのプロの技だ。ほら、これでよし」

帯をしつかりと結び、形を整える。

「完璧だ。これでどこにも着崩れしない」

「ふ、ふん。当たり前でしょ。私のスタイルがいいんだから、どんな服でも着こなせるに決まってるわ」

彼女はそう言つて、再び自慢げな態度に戻つたが、俺から少し離れると、浴衣の裾を気にしながら、ちらりとこちらを見た。

「どう……な、何か言いたいことがあるなら、はっきり言いなさいよ！」

その浴衣姿は、普段のブラグスーツ姿とはまた違った魅力があつた。

着慣れない和装が、彼女の持つ女性的なラインを強調し、特にその胸の豊かさを、隠しきれない色気として醸し出している。

俺は少しドキドキしながら、素直に言葉を返した。

「似合ってるよ。すごく綺麗だ」

アスカの顔が、さらに真っ赤になる。彼女は数秒間、何か言い返そうと言葉を探していたようだが、結局見つからなかったらしい。

「うる、うるさいわね！ 当たり前のことを言うんじゃないわよ！ まったく、アンタって奴は……」

アスカは、顔を背け、持っていた手ぬぐいを俺の顔に向かって投げつけた。

「あんたバカア〜！」

最高の褒め言葉だ。この旅行は、最高のスタートを切った。

「さあ、このままお茶でも飲んでゆっくりするのもいいけど、冷める前に温泉、行くか」

「……ええ。分かったわよ。温泉よ、温泉。アンタなんか負けなくらい、ゆったり入ってやるんだからね」

そうは言ったものの、アスカの声はどこか弾んでいた。

「じゃあ、行ってくる」

「ええ。せいぜい、ゆっくり浸かってきなさい」

そうは言ったが、アスカの瞳は、すぐにこの部屋に戻ってくる俺の姿を、待っているような気がした。

温泉に入った後、二人きりの夜が始まるのだから。

—————

第10章..湯けむりと濡れた肌、あるいは彼女の無防備な挑発

案内されたのは、離れにある貸切の露天風呂だった。

岩組みの湯船からはもうもうと白い湯気が立ち上り、夜の冷気と混じり合っている。

頭上には、アスカが期待していた通りの満天の星空。だが、今の俺の神経は、星空どころではなかった。

脱衣所で分かれるのかと思いきや、ここは「家族風呂」という名目の、完全な混浴スペースだったのだ。

「……へえ。随分と気が利くじゃない」

脱衣カゴの前で、アスカが俺を見上げてニヤリと笑う。その笑みは挑発的で、それについてどこか試すような響きを含んでいた。

「別に変な意味で選んだわけじゃないぞ。景色がいいって評判だったからな」

「はいはい、言い訳はいいわよ。どうせアンタのことだもの、隙あらば……って考えてたんでしょ？」

アスカは鼻で笑うと、俺の方へ背を向けた。

シュルリ、と腰紐が解かれる音が、静寂な空間にやけに大きく響く。

「先に入るわよ。十秒数えてから来なさい。覗いたら……分かってるでしょうね？」

その言葉とは裏腹に、彼女は隠そうともせず浴室を脱ぎ捨てた。白い湯気の向こう、ガラス戸越しに揺らめく肢体は、陶磁器のように白く、そして滑らかだった。

十秒なんて数える余裕もなく、俺は喉が渇くのを感じながら、急いで服を脱いで後を追った。

◇

外に出ると、ひんやりとした夜風が火照りかけた肌を撫でた。

湯船の向こう側、岩に背を預けるようにして、アスカが肩までお湯に浸かっていた。濡れた金色の髪が首筋に張り付き、湯気で上気した頬が、普段の勝気な表情を少しだけ幼く、そして艶やかに見せている。

「……遅いわよ。待ちくたびれたわ」

アスカは不満げに唇を尖らせたが、その瞳は熱っぽく潤んでいた。

俺はお湯が溢れる音を立てないように、静かに湯船へと体を沈めた。熱めの湯が心地いい。だが、それ以上に意識してしまうのは、同じ湯の中にアスカがいるという事実だ。

「こつち来なさいよ」

アスカが命令口調で言う。俺が少し躊躇していると、彼女は不機嫌そうに眉を寄せ、水面

の下で足を伸ばし、俺の太ももをツンとつついた。

「聞こえないの？ 私の近くに來なさいって言ってるの。……お湯、広すぎて寒いだよ」

嘘だ。源泉かけ流しの湯は十分に熱い。だが、その可愛らしい強がりに従わない理由はなかった。

俺がお湯の中を移動し、彼女の隣、肩が触れ合うか触れ合わないかの距離に座ると、アスカは「ふん」と満足げに鼻を鳴らした。

そして、不意に。

彼女は豊かな胸元を隠していたタオルを、無造作に外した。

「!？」

目のやり場に困る俺を見て、アスカは楽しそうにクスクスと笑った。

「何よ、その顔。……見たいんでしょ？」

白い肌の上を、透明な雫が伝い落ちていく。その視線の先には、彼女が誇る二つの膨らみがあった。

以前よりも明らかに、そのポリウーームは増していた。張り詰めたような弾力と、重力に逆らうような美しい曲線。先端の桜色は湯気の中で妖艶に咲き誇り、見る者の理性をじわじわと焦がしていく。

「最近ね、きつくなったのよ」

アスカは自分の胸を、愛おしむように両手で下から持ち上げた。ぶるん、と豊かな果実が形を変え、指の間から溢れそうになる。

「ブラグスーツの胸元が、圧迫されて苦しいの。……また、育っちゃったみたい」

彼女は困ったように言うが、その声色は明らかに自慢げだった。

自分という存在が、肉体的に成熟し、完成されていくことへの絶対的な自信。そしてそれを、俺という男に見せつけることへの優越感。

「すごいな……。本当に、綺麗だ」

俺が素直な感想を漏らすと、アスカの喉の奥から、甘く震えるような吐息が漏れた。

「……………ん。当たり前でしょ。私は選ばれたパイロットなんだから。頭脳も、才能も、そして……身体だって、誰にも負けないわ」

彼女は俺の方へと体を寄せ、濡れた肌をびたりと密着させてきた。

お湯の中、彼女の柔らかな太ももが俺の足に絡みつく。柔らかく、そして熱い弾力が、腕に、胸に押し付けられる。

「ねえ……………」

耳元で、アスカが囁いた。熱い吐息が耳朶をくすぐり、背筋に電流が走る。

「ただ見てるだけ？ 折角、特別に見せてあげてるのに」

彼女の手が、お湯の中で俺の手を取り、自分の胸へと導いていく。

「アタタみたいなの凡人にはもったいないくらいなの……最高の感觸、確かめてみなさいよ」

「いいのか？」

「……バカ。いちいち聞くんじゃないわよ」

アスカは潤んだ瞳で俺を睨み上げると、自ら俺の掌に、その豊かな膨らみを押し付けた。

掌いっぱい広がる、圧倒的な柔らかさと重量感。

指先が沈み込むほどの弾力。心臓の鼓動が、肌を通して直接伝わってくる。

俺がゆっくりとその形をなぞるように指を動かすと、アスカはビクッと体を震わせ、小さく背中を反らした。

「んっ……あ……」

口元から漏れる、甘く切ない声。

普段の凛としたアスカからは想像もできない、無防備な反応。

「ど、どう……？大きく、なってるでしょ……？」

強気な言葉とは裏腹に、彼女の顔は茹で上がったように真っ赤だった。

承認欲求。

彼女は知りたいのだ。自分がどれほど魅力的で、どれほど俺を夢中にさせているか。それを肌で感じることでしか、彼女の心の空洞は埋まらない。

「ああ、すごいよ。アスカ。最高だ」

「……………つ！ん……………もつと、強く……………」

俺がさらに熱心に愛でると、アスカは俺の首に腕を回し、濡れた身体をさらに預けてきた。硬い乳首が俺の胸板を擦る。お湯の揺らめきに合わせて、二人の身体が擦れ合い、滑らかな摩擦が快感を生んでいく。

「はあ……………つ、アンタの手……………熱い……………」

アスカの呼吸が荒くなる。

彼女はもう、自分を保つ余裕を失いかけていた。プライドの高い彼女が、俺の前でだけ見せる、雌としての顔。

「ねえ、ここじゃ……………これ以上は、ダメよ……………」

アスカは途切れ途切れにそう言いながらも、腰を俺に押し付けるのを止めない。

むしろ、もっと触れてほしい、もっと奥まで踏み込んでほしいと、身体全体で訴えているようだった。

「……分かってる。のぼせる前に上がろうか」

俺が理性を総動員してそう告げると、アスカは不満そうに、しかしどこか安堵したように息を吐き、俺の耳元に唇を寄せた。

「……部屋に戻ったら……続き、してあげる」

その言葉は、湯気の熱さよりも強烈に、俺の本能を刺激した。

「覚悟しときなさいよ。……今夜は、アンタが泣いて謝るまで、寝かせてあげないんだから」

濡れたアスカの瞳が、妖しく光る。

それは、獲物を完全に捕らえた捕食者の目であり、同時に、愛されたくて仕方がない孤独

な少女の目でもあった。

温泉の熱気と、彼女の放つ圧倒的な色気に当てられ、俺はただ頷くことしかできなかつた。

—————

第〇章…乱れた浴衣と、甘く溶けるプライドの味

部屋に戻ると、すでに女将によって布団が敷かれていた。

障子越しの月明かりだけが頼りの薄暗い室内。湯冷めしないようにと暖房が効いた部屋は、どこか密室めいた背徳感を孕んでいる。

「……何よ、その目」

アスカが濡れた髪をタオルで拭きながら、こちらを睨む。だが、その視線に鋭さはなく、むしろ潤んだ瞳は誘うように揺れていた。

湯上がりの肌は桃色に染まり、急いで着ただけの浴衣は襟元がだらしなく開き、そこから

覗く白磁の谷間が、俺の視線を釘付けにする。

「髪、乾かしてやるよ」

「……子供扱いしないでよ。……でも、まあ、アンタがどうしてもって言うなら、させてあげなくもないわ」

素直じゃない許可を得て、俺はアスカを座布団に座らせ、背後からドライヤーを当てた。金色の細い髪が指の間を滑り落ちるたび、シャンプーの香りと、彼女自身の甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

「ねえ……さっきの続き、忘れてないわよね？」

ドライヤーの音に紛れて、アスカが呟いた。

俺がスイッチを切ると、部屋に静寂が戻る。アスカはゆっくりと振り返り、俺の首に腕を絡ませた。

「キス、しなさいよ。……私がそうしたい気分なの」

命令口調だが、その唇はわずかに震えている。

俺は答えの代わりに、彼女の唇を塞いだ。

「んっ……う……」

触れ合った瞬間、アスカの喉から甘い音が漏れた。

最初はついでにむような優しいキス。だが、アスカはそれだけでは満足しなかった。彼女は焦れたように俺の下唇を甘噛みし、舌先を強引にねじ込んでくる。

「んんっ、あ……ふう……っ！」

互いの唾液が混ざり合う濡れた音と、荒い鼻息が重なり合う。

アスカのキスは食欲だ。まるで、俺の呼吸も、存在も、すべてを奪い尽くそうとするかのように激しい。彼女の小さな手が俺の背中を強く掻きむしる。

「はあ……つ、あんた……んんっ！」

唇が離れると、銀の糸が妖艶に引いた。

アスカは肩で息をしながら、トロンとした瞳で俺を見上げる。その表情は、もうパイロットとしての仮面を剥ぎ取られ、ただ愛されたいと願う一人の少女のものだった。

「……まだ、足りないわ。全然、足りない」

彼女は自ら浴衣の合わせ目を大きく広げた。

露わになったのは、湯気で湿り気を帯びた、圧倒的な存在感を放つ二つの果実。

先端の紅は興奮で硬く尖り、豊かな膨らみは呼吸に合わせて上下し、俺を誘惑している。

「ほら……好きにしていって言ったでしょ？ じらさないでよ、バカ……」

煽るような言葉に、俺の理性は弾け飛んだ。

彼女を布団へと押し倒す。畳の匂いと、アスカの熱気が混ざり合う。俺の手が、その豊かな胸を鷲掴みにした。

「ひゃうっ！……あ、っ………！」

大きな掌でも収まりきらないほどのポリウム。

指が肉に深く沈み込み、揉みしだくたびに形を変える柔らかさ。まるで極上のマシユマロの中に熱い芯が通っているような、得も言われぬ感触だ。

「ああっ、ん、すご……っ！ そんなに揉んだら……形、変わっちゃう……っ！」

「変わるくらいが丁度いいんだろ？ アスカのこれ、本当にすごいな」

「あっ、んう……っ！ そうよ……すごいのは……私のは……世界一なんだから……っ！  
んあっ！」

俺が親指で敏感な突起を擦り上げると、アスカは弓なりになって絶叫に近い嬌声を上げた。強気な言葉とは裏腹に、身体は正直だ。快感に翻弄され、足の指先まで丸まっている。

「見て……もつと、ちゃんと見て……っ！ 私の身体……アンタの手で、どうなってるか……っ！」

彼女は自分の胸が揉みしだかれる様を見せつけるように、上体を起こそうとする。

白く滑らかな肌に、俺の指の跡が赤く残っていく。それが彼女の被虐心と、歪んだ承認欲求を満たしていくのがわかった。

「綺麗だ、アスカ。誰よりも」

「……っ！ ああ、もつと……っ！ もつと行って！ 誰よりも一番だって……私だけだって……っ！」

俺は再び唇を重ねながら、反対の手でもう片方の胸を愛撫した。

舌で口内を蹂躪しながら、手では豊満な肉体を支配する。上と下、両方からの刺激に、ア

スカの思考は完全に溶けていった。

「んんーっ！むぐっ……ふあ、あ……っ！」

口を塞がれているため、くぐもった悲鳴のような声しか出せない。

だが、俺の背中に回された爪が食い込む痛みが、彼女の絶頂に近い興奮を伝えてくる。

唇を離し、俺は彼女の首筋から鎖骨、そして谷間へとキスを落としていった。

「ひゃっ、あ……そこ、くすぐった……いや、嘘……もっど、して……っ」

そして、ついにその先端を口に含んだ。

舌先で転がし、強く吸い上げる。

「あっ！イツ……や、だめっ、それ……響く……っ！あああっ！」

アスカが大きいのけぞり、俺の頭を胸に押し付けるように抱きしめた。

大きく育った胸は、俺の顔を埋め尽くすほどの包容力がありながら、同時に彼女自身を狂わせる性感帯でもあった。

「すごい……吸われてる……私の、おっきい胸……アンタに食べられてる……っ」

彼女は快感に喘ぎながらも、どこか勝ち誇ったように呟く。

俺が夢中になって彼女を貪れば貪るほど、彼女の「必要とされたい」という乾きが満たされていくのだ。

「ねえ……私のこと、好き？ 誰にも渡したくないくらい、好き？」

胸を愛撫され、快楽に溺れながら、アスカは懇願するように問いかけてくる。

その瞳は不安と期待で揺れ、涙が滲んでいた。

「ああ、大好きだ。アスカ以外、考えられない」

俺がそう嘔き、もう一度強く吸い上げると、彼女の身体がビーンと張り詰めた。

「あつ、ああつ！ 私も……私もよ……！ アンタなんか……アンタなんか、大っ嫌いだけど……大好きっ！ んあああつ！」

矛盾した愛の告白と共に、アスカの身体が大きく痙攣した。

浴衣は完全にはだけ、露わになった白い肌が、夜の闇の中で甘く、妖しく輝いていた。

—————

第4章…緋色の果実と、甘美なる服従

「あつ、んう……！ そ、そこ……もつと……っ！」

夜の静寂を切り裂くように、アスカの高く甘い声が響く。

乱れきった浴衣はもはや彼女の身体を隠す役割を果たしておらず、白磁のような肌が月明かりに濡れて艶めかしく光っていた。

俺は彼女の豊富な胸に顔を埋め、夢中でその柔らかさを貪っていた。

吸い付くたびに、アスカの身体がビクンと跳ね、俺の髪を掴む指に力がこもる。

「はあ、あ……っ！ アンタ……本当に、好きね……。そんなに……私の胸が、いいの……？」

「ああ、最高だ。アスカのここから離れたくない」

俺がそう呟き、再び先端の愛らしい突起を強く吸い上げると、アスカは喉を反らせて切なげな喘ぎを漏らした。

「ひあっ……！！ん、んううう……っ！ バカ……っ、そんなに強く吸ったら……変になっちゃう……っ！」

彼女の胸は、以前よりも確実にその重量感を増していた。俺の舌が転がすたびに、たぶん、と重たげに揺れ、吸い付けば指の間から溢れんばかりの肉感が頬を圧迫する。

それはただの脂肪の塊ではない。彼女が「大人」になった証であり、同時に俺を誘惑するための最強の武器だ。

「ねえ……もつと、吸って……。赤ちゃんみたいに……。強く……。っ」

アスカが俺の頭を抱きしめ、自分の方へと押し付けてきた。

その仕草は、まるで幼子に乳を与える聖母のように慈愛に満ちていながら、同時に雄を誘う雌の背徳的な色気を放っていた。

「んちゅ……。っ、じゅぶ……。っ」

卑猥な水音が部屋に響く。

俺は彼女の望み通り、赤子が母乳を求めるかのように、一心不乱にその先端を吸った。

「ああっ、んっ！そ、そう……っ！いい子……もっど、もっど飲み干して……っ！」

アスカの呼吸が荒くなる。

彼女にとって、胸を吸われるという行為は、単なる性的な快感以上の意味を持っていた。誰かに必要とされたい。身体の一部を求められ、奪われることで、自分の存在価値を確かめたい。そんな飢えた心が、俺の唇を通して満たされていく。

「あ、ああ……っ、すごい……っ。脳みそ、とろけそう……っ。アンタに、全部……吸い出されちゃう……っ」

彼女の瞳が虚ろになり、口元からは締めまりなく涎が伝い落ちる。

高慢なエリートパイロットの面影はどこにもない。そこにあるのは、快楽に墮ち、男に愛されることだけを乞う一人の女の姿だ。

「アスカ、味、するよ」

「えっ………？」

俺が顔を上げ、わざとらしく唇を舐めると、アスカの顔がボンッと音を立てそうなほど赤くなった。

「う、嘘よ………！出るわけないでしょ、そんな………っ！」

「いや、甘い味がする。アスカの蜜の味だ」

実際には母乳など出るはずもない。だが、興奮と汗、そして彼女自身の甘い匂いが混ざり合い、俺にはそれが極上のネクターのように感じられた。

「………っ、バカ………変態………っ。私のこと、そんな目で見て………」

アスカは涙目で俺を睨むが、その手は俺の頭を離そうとしない。むしろ、もっと続けて欲しいと懇願するように、俺の顔を再び自分の胸へと誘導する。

「……いいわよ。特別に……飲ませてあげる」

彼女は諦めたように、いや、むしろ積極的にその役割を受け入れた。

「私の全部……アンタにあげる。だから……残さず、味わいなさいよ……っ」

その言葉は合図だった。

俺は反対側の胸にも手をかけ、両方の膨らみを中央に寄せ集めた。圧倒的なポリユームの谷間に顔を埋め、右へ、左へと交互に食らいつく。

「ああっ！ ひゃああっ！ 二つ同時に……っ！ 無理、おかしくなる……っ！」

「んぶ……っ、ちゅう……っ！」

「あっ、ああっ、イツ……！ 乳首、ちぎれちゃう……っ！ でも、いい……っ、もっと……っ！  
壊して……アンタの唇で、私を壊してええっ！」

アスカの腰が浮き上がり、俺の太ももに擦り付けられる。

下腹部からの熱気が、俺の腹にも伝わってくる。彼女の中心はもう、準備万端に濡れそぼっているに違いなかった。

「はあ……っ、はあ……っ。ねえ……胸だけじゃ、もう……嫌……」

絶頂に近い波に翻弄されながら、アスカが掠れた声で訴える。その瞳は、完全に理性を手放し、雌の欲求に支配されていた。

「……入れて。早く……私の中に、アンタを……」

プライドの高い彼女が、自分から求めてくる。

その事実が、俺の興奮を頂点へと押し上げた。

「アスカ……」

「お願い……っ。私を、満たして……。アンタで、いっぱいにしてよお……っ！」

彼女は自ら脚を大きく広げ、無防備な秘所をさらけ出した。

そこはもう、期待と興奮で溢れ出した愛液でぐっしょりと濡れ、俺を受け入れる準備を整えて待ち構えていた。

「愛してるわ……だから、めちやくちやにして……っ」

俺はその言葉に応えるべく、彼女の身体へと覆いかぶさった。

甘いミルクのような匂いと、獣のような熱気が、二人を包み込んでいった。

第01章…朝が来るまで、世界は私たちだけのもの

「……来て。もう、待てない……っ」

布団の上、アスカが涙で濡れた瞳で俺を見つめ、震える手を伸ばしてくる。その指先が俺の肩に触れ、爪が食い込む。彼女の身体は期待と昂ぶりで熱を發し、部屋の空気さえも変えてしまうほどだった。

「ああ……一つになろう、アスカ」

俺は彼女の白く滑らかな太ももの間に体を沈めた。

そこはもう、愛液で濡れそぼり、俺を迎え入れる準備が完全に整っていた。ゆっくりと、先端を彼女の秘所にあてがう。

「んっ……！ 熱い……アンタの、そこにある……っ」

アスカが息を呑み、無意識に腰を揺らす。

俺は彼女の瞳を見つめたまま、ゆっくりと腰を沈めていった。

「……………っ、くう……………っ！……………は、あ……………っ！」

きつい。あまりにも締め付けが強い。

まるで俺の侵入を拒むような、それでいて逃さないように吸い付くような、相反する感覚。アスカの内部は熱く、襷の一枚一枚が俺の形を確かめるように絡みついてくる。

「おつきい……………っ！アスカの……………奥まで、入って……………くる……………っ！」

「アスカ……………大丈夫か？痛くないか？」

「……………バカ、舐めないでよ……………っ。これくらい……………どうってこと、ないわよ……………っ。もつと……………もつと奥まで、来なさいよ……………っ！」

彼女は強がり言いながらも、苦悶と快楽が入り混じった表情で、俺の背中に腕を回し、力

いっぱい抱きしめてきた。

その合図に応え、俺は根元まで一気に体を押し込んだ。

「あっ！　っっっ！　んああああっ！」

二人の身体が、隙間なく完全に繋がった瞬間。

アスカの身体が弓なりに反り、喉の奥から言葉にならない叫びが迸った。

「はあ、はあ……っ。すごい……お腹の奥、いっぱい……アンタがいる……」

「アスカ……愛してる」

俺は彼女の額、頬、そして唇へと雨のようにキスを降らせながら、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「んっ、あ……っ！　動くの……？　待って……まだ、慣れて……ひゃうっ！」

最初は優しく、彼女の様子を確かめるように。

だが、敏感な内壁を擦り上げるたびに、アスカの反応は劇的だった。

「そこっ……！だめっ、そこ……っ！擦れるっ……！んんっ、あああっ！」

「ここが、いいのか？」

「うるさいっ……聞くな……っ！いいから……もっど……っ！激しくしなさいよ……っ！」

彼女の懇願に応え、俺はピッチを上げた。

肉と肉が打ち付け合う音が、濡れた水音と共に部屋に響く。

アスカの胸が激しく揺れ、汗ばんだ肌が俺の肌と擦れ合い、摩擦熱が理性を焼き尽くしていく。

「ああっ、んあっ、んあっ！　すごいっ、すごいっ！　アンタの……っ、ガツガツ当たって……っ！　頭、真っ白に……なるうっ！」

アスカはもう、自分の声を抑えることができなかつた。

普段のブライドも、強気な態度も、すべてが快楽の波に飲み込まれていく。

俺の背中に爪を立て、髪を振り乱し、ただひたすらに俺を求めてくる。

「ねえ……っ、キス………！　キスしてっ………！」

彼女が唇を突き出し、俺たちは繋がったまま激しく舌を絡ませた。

唾液が混じり合い、息継ぎもできないほどの濃厚な接吻。

下半身で繋がり、唇で繋がり、心臓の鼓動さえも同期していく。

「んんーっ！　ぶはっ………！　はあ、はあ………っ！　アンタ………好きっ、大好きっ………！　私を………私だけを、見ててええっ！」

「見てるよ、アスカだけだ……っ！ 最高だ、アスカ……！」

絶頂が近づいていた。

俺の動きは本能のままに激しさを増し、アスカの最奥を執拗に叩く。

「あっ、そこっ、奥っ……！ 来るっ、来ちゃうっ……！ アンタのが……奥に、届いてるうっ！」

アスカの膣壁が、痙攣するように俺を締め付け始めた。

その圧倒的な収縮が、俺の限界を引き寄せる。

「アスカ、もう……出るっ……！ 中に、出しているか……！？」

「いいっ……！ いいわよっ……！ 全部、ちょうだいっ……！ アンタの熱いの……私の中に、ぶちまけてええっ！」

アスカが足を俺の腰に絡め、逃がさないようにロックする。  
彼女の叫びが、俺の背中を押した。

「いくつ……！！ アスカアッ！」

「あああつ！ イッ……！！ いくうううつ！」

ドブン、と。

俺はアスカの最深部で、生命の脈動を解放した。

何度も、何度も。俺の全てを彼女の中に注ぎ込むように、腰を押し付ける。

「んああつ！ 熱いつ……！！ 熱いの、来てるっ……！！ んぐううつ！ お腹……熱いよおつ！」

アスカはビクンビクンと身体を跳ねさせながら、俺が注ぎ込む白濁した熱を受け止めた。

子宮口を直接叩くような脈動に、彼女は白目を剥きかけるほどの絶頂を繰り返し、断続的な悲鳴を上げ続ける。

「はあ……っ、はあ……っ、ん……っ……」

長い、長い絶頂の余韻。

俺が全ての力を出し尽くし、彼女の上に崩れ落ちると、アスカは荒い息をつきながらも、愛おしそうに俺の頭を抱きしめた。

「……んう……。全部……入った……」

彼女の言葉通り、俺の一部は完全に彼女の一部となっていた。

密着した結合部からは、二人分の愛液と精が混じり合って溢れ出している感覚がある。

「……気持ちよかった？」

アスカが、耳元で小さく囁いた。その声は、とろけるように甘く、そして不安げだった。

「ああ……今まで生きてきた中で、一番良かった」

俺が顔を上げ、汗で張り付いた彼女の前髪を優しく払うと、アスカはふにやりとだらしく微笑んだ。

「……バカね。一番に決まってるじゃない。相手は、この私なんだから」

そう言いながらも、彼女の頬は上気し、瞳は満足感で潤んでいる。

「私も……良かったわ。アンタなんかでイツちやうなんて、ちょっと悔しいけど……。でも、すつごく……幸せだった」

「アスカ……」

たまらなくなり、俺は再び彼女の唇にキスをした。

今度は優しく、互いの存在を慈しむような、長い長いキスを。

「……ねえ。まだ、抜かないで」

俺が身を起こそうとすると、アスカが腰に足を回したまま、首を横に振った。

「もう少し……このままがいい。アンタが私の中にいるって……感じていたいの」

その言葉は、彼女が抱えてきた孤独の深さを物語っていた。

誰かと繋がりたい、一つになりたいという切実な願い。それが今、満たされているのだ。

「分かった。ずっとこうしていよう」

俺は彼女の身体ごと抱きしめ、布団を引き寄せた。

アスカは俺の胸に顔を埋め、安心したように息を吐く。

「……ねえ、約束しなさいよ」

「ん？」

「これから……ずっと、私のそばにいなさい。私が必要とする限り……いいえ、私が飽きるまで、アンタは私のモノなんだから」

相変わらずの傲慢を言い回し。

「だけど、俺の胸に回された手の震えが、それが「ずっと一緒にいて」という言葉の裏返しであることを教えてくれている。」

「ああ、約束する。俺はずっとアスカのそばにいるよ」

「……ふん。なら、よし」

アスカは小さく笑い、そしてゆっくりと目を閉じた。

「……おやすみ」

消え入るような声で、彼女が眠りについた。

窓の外、空が白み始めている。

長い夜が明け、新しい朝が来る。

でも、この腕の中にある温もりだけは、決して離さないと誓った。

—————

エピソード…朝露と、刻まれた所有の証

障子の隙間から差し込む朝日が、昨夜の戦場となった布団を白く照らし出していた。

部屋の中には、独特の栗の花のような匂いと、アスカ自身の甘い体臭、そして愛液の乾いた匂いが混じり合い、むせ返るような背徳的な空気が漂っている。

「……んう……。重い……」

俺の腕の中で、アスカが不満げに、しかし甘えた声で寝言を漏らした。

彼女の裸体は、昨夜の激闘を物語るように乱れている。

滑らかな白い肌の至る所に、俺が付けた赤いキスマークが花びらのように散らばっていた。首筋、鎖骨、そしてあの自慢の豊かな胸にまで。

特に胸の先端は、執拗に愛でたせいでまだ赤く腫れぼったく、朝の冷氣の中で敏感に尖っている。

「……………ん……………あつ……………」

俺がその無防備な背中を撫でると、アスカはビクリと肩を震わせ、ゆっくりと瞼を開けた。青い瞳が、まだ夢現の中でとろんと濁っている。

「……………おはよ、アスカ」

「……………ん……………最悪の目覚めよ」

彼女はそう毒づいたが、身体は俺から離れようとせず、むしろシーツの中で素肌を擦り付けるように密着してきた。

太もものあたりが、ぬるりと湿っている。昨夜、俺が注ぎ込んだ大量のものが、身体の向きを変えた拍子に溢れてきたのだろう。

「……見てよ、これ」

アスカは身を起こそうとして顔を擡め、自分の身体を指差した。

「アンのタのせいで……身体中、アザだらけじゃない。……腰も、砕けそうなくらい痛いし。……股の間なんて、ヒリヒリして感覚がないわ」

文句を言いながらも、彼女は自分の身体に刻まれた「所有の証」を、どこか誇らしげに、愛おしそうに指でなぞっている。

「ごめん。可愛すぎて、加減ができなかった」

「……ふん。言い訳はいいわよ。……まあ、アンタがそれだけ夢中だったって証拠だから……  
今回だけは、許してあげる」

アスカはそう言うと、シーツを胸元まで引き上げたが、その豊かな双丘は隠しきれず、動  
くたびにたぶん、と重たげに揺れる。

「……ねえ。朝から元気すぎない？」

俺の下半身の硬さに気づいたアスカが、呆れたように、しかし艶然と微笑んだ。  
その瞳には、拒絶の色はなく、むしろ新たな熱が灯り始めている。

「アスカが隣に裸でいるんだ。仕方ないだろ」

「……バカ。野獣ね、アンタ」

彼女は小さく笑うと、布団の中で俺の方へとにじり寄ってきた。

柔らかく、温かい肢体が絡みつく。

「……………んっ、あ……………。まだ、そこ……………敏感なの……………っ」

俺の手がふいに胸に触れると、アスカは鼻にかかった甘い喘ぎ声を漏らした。

昨夜、あれほど開泰された身体は、ほんの少しの刺激でも過剰に反応してしまふようだ。

「だめ……………そんな触り方……………っ。また、濡れちゃう……………っ」

「濡れてもいいだろ？ まだチェックアウトまで時間がある」

俺が耳元で囁き、耳たぶを甘噛みすると、アスカの身体から力が抜け、俺の胸に崩れ落ちてきた。

「……………はあ、あ……………っ。本当に、バカなんだから……………」

彼女は俺の首に腕を回し、上目遣いで俺を睨む。

その表情は、かつての孤高のエースパイロットのものではない。完全に雌の顔をした、愛に溺れる一人の少女の顔だ。

「……いいわよ。責任、取りなさいよ」

「え？」

「私の身体、こんな風にした責任よ。……朝まで、たつぷり可愛がってくれんてしょ？」

挑発するように、アスカは自ら俺の唇を奪いに来た。

朝の気配など吹き飛ばすような、濃厚で粘りつくようなデープキス。

舌が絡み合い、唾液が交換されるたびに、彼女の喉から甘い鳴き声が漏れる。

「んんっ、ちゅ……っ！ ぷはっ……！ ……好きにしていいわ。私の全部……骨の髄まで、アンタの色に染め変えて……」

彼女は自ら脚を開き、まだ昨夜の熱を孕んだ秘所をさらけ出した。

そこには、俺たちが愛し合った証である白濁が、朝日に照らされてキラキラと輝いていた。

「……愛してる、アスカ」

「……知ってるわよ。……私もよ。……バカ」

二度目の情事が始まる。

温泉宿の朝、鳥のさえずりさえもかき消すような、二人の甘い喘ぎ声と、肉体がぶつかり合う音だけが、いつまでも響いていた。

これは、孤独だった少女が「居場所」を見つけ、心身ともに満たされるまでの物語。

もう彼女は一人ではない。

この痛みも、快感も、重みも。すべてが、彼女が愛されているという、何よりの証明なのだから。

く  
完  
く